慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東京市立図書館における社会教育実践 : 今澤慈海の図書館理念と活動を中心として
Sub Title	Social education practices at Tokyo City Library : focused on the ideas and activities of Imazawa Jikai
Author	山梨, あや(Yamanashi, Aya)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.56 (2003.) ,p.51- 62
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000056-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東京市立図書館における社会教育実践

——今澤慈海の図書館理念と活動を中心として——

Social education practices at Tokyo City Library

—Focused on the ideas and activities of Imazawa Jikai—

山　梨　あ　や*
Aya Yamanashi

The purpose of this study is to investigate the social education practice at Tokyo City Library, focusing on the ideas and activities of Imazawa Jikai (1882–1968).

It has been recognized that the government of the time laid strict regulations on libraries of its forming social education system.

However, it was revealed that Tokyo City Library introduced various practices that lived up to the people's cultural demand in urban communities.

Under Imazawa's guidance, in which the library was characterized as a user-oriented and life-long education institution, Tokyo City Library progressed and developed.

While there were "innovative" bureaucrats, who regarded the significance of library as an instructive institution where people nurtured their spontaneous desire to learn.

Through studying Imazawa's enlightening ideas and that of bureaucrats', I would like to consider some aspects of practices at Tokyo City Library.

はじめに

日本の社会教育が制度的にも思想的にも欧米の近代市民社会の形成をモデルとした近代的性格を有するようになるのは地方改良運動を経て1920年代末葉であり，この時期は社会教育成立期といわれている[1]。本稿はこの時期に発展した図書館に注目し，図書館における社会教育実践を検討することを目的としている。

社会教育成立期における図書館と社会教育との関係に注目した社会教育史研究は必ずしも多くはないが，倉内史郎は『明治末期社会教育観の研究』において「図書館の事業が第一義的に教育的・人間啓発的性格を持つことは明らかである。社会教育の主要施設として，地域団体の活動とはその作用の仕方をまったく対庶的に異にする図書館がかならずあげられていたのは，あらためて注意されてよいことであろう[2]。」と社会教育史研究において図書館の位置づけを検討する必要性を指摘している。しかし，図書

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程（日本教育史）

館の事業が社会教育史にどのように位置付くのかは，図書館の実態も含めて十分に検討されているとはいえない[3]。また『日本近代教育百年史[4]』を初め従来の社会教育史では，戦前期の図書館は思想善導機関としての役割が強調されてきた[5]。しかしながら，これらの指摘は法制度や政策の検討に基づくものが中心であり，地域における社会教育の実践，つまり社会教育の実態に焦点をあてた研究はあまり見られない[6]。

一方，図書館史研究の分野においては社会教育成立期の図書館論や図書館に関する研究蓄積がある。石井敦の『日本近代公共図書館史の研究』（日本図書館協会，1972 年）はその嚆矢であり，その他川本宇之介の図書館論を検討した山口源治郎の研究[7]，東京市立図書館の活動を検討した奥泉和久[8]や是枝英子の研究[9]などがある。これらの研究は図書館政策と図書館における活動，活動を推進した人物の図書館論とを併せて検討しており，当時の図書館とそれを取り巻く状況を歴史的に考察する上で資するところが大きい。しかしながら，これらの研究はともすると行政側と図書館員とを単純な対立図式でとらえる傾向がある。たとえば石井は臨時教育会議の答申以降，行政側が図書館を教化機関とする一方で，図書館員は民衆のための図書館づくりを提唱したとしている[10]し，是枝も「大正デモクラシー運動と深く関わりながら，住民に開かれた図書館を目指して努力し，実践した公共図書館」である東京市立図書館など「ごく少数の例外」を除いて，戦前期の図書館の大部分は国民教化機関として機能したという論[11]を展開する。しかしながら，この対立図式ゆえになぜ東京市立図書館のような「ごく少数の例外」が存在し得たのか，そして当時の社会教育構想と図書館の理念とがどのような関係にあったのかは不明確である。

このように，社会教育史においては社会教育成立期の図書館を思想善導機関と位置付ける一方で，図書館史においては東京市立図書館などを例に挙げながら，思想善導への対抗的存在，「デモクラシー」の旗印としての図書館を強調するという二項対立的な評価がされてきた。しかしながら，東京市立図書館に対して思想善導か，デモクラシーかという二項対立的な評価を下すことは，結果的には同時代に社会教育としてなされた一つ一つの活動や実践を，社会教育史における「例外」として歴史から切り捨ててしまう危険性を孕んでいる。むしろ，これらの活動や実践が「例外」としてではなく，その時代にどのように存在し得たのかを明らかにすることによって，実体のある社会教育史を描き出すことが可能になるだろう。そのためには，図書館における実践に即して当時の社会教育構想との関係を再検討することが必要であると考える。

本稿では従来の研究を踏まえながら，1908 年（明治 41）の開館以降，蔵書数，閲覧者数共に全国で最も高い水準にある図書館として発展していた東京市立図書館における社会教育実践を検討する。東京市立図書館をとりあげる理由は以下の三点にある。第一に，「公共図書館における代表的な指導者[12]」とされる今澤慈海（1882-1968 年）が現在の図書館長に相当する館頭として積極的な活動を展開し，「東京の図書館史上まさに一時代を画す[13]」功績を残したとされていること，第二に館報である『市立図書館と其事業[14]』（以下『其事業』）によって当時の活動の様子を把握できること，第三に当時の東京では「都市」が形成されつつあり，都市に密着した活動が展開されたことである。以下では東京市立図書館における実践を検討し，思想善導機関としての役割が強調されてきた図書館の実態，そして都市における社会教育実践のあり方を明らかにする。また，図書館運営に貢献した今澤の理念および実践に即して当時の社会教育構想との関係を再検討することで，社会教育実践を踏まえた社会教育成立期の歴史を描く一助としたい。

1. 社会教育政策と図書館

東京市立図書館の事例を検討する前に，社会教育政策と図書館との関係を概観しておこう。近代日本において図書館に対する注目が高まったのは明治30年代前後である。欧米とは異なり，図書館を民衆のための教育機関としてとらえる発想は乏しく，財政上の問題もあって文部省の図書館に対する政策は長い間等閑視されていた[15]。日清戦争後のナショナリズムの昂揚に後押しされる形で，図書館に関する単独法令である図書館令が規定されたのは1899年（明治32）のことである。

『日本近代教育百年史』では，図書館発展の原因として「地方改良運動」，「デモクラシー」，「思想善導」が挙げられている[16]。内務官僚井上友一は地方改良運動を推進する過程で図書館の設置を奨励し，文部省も通俗教育調査委員会の設置や第一次大戦後の臨時教育会議における「通俗教育ニ関スル件」の審議を通じて思想善導を目的とした社会教育政策を活発化させていく。これに伴い，図書館に関する法令も整備されていった。たとえば1910年（明治43）には図書館令が改正されて図書館の設置基準が明確化し，1921年（大正10）には公立図書館職員令によって図書館員の身分保障がされることとなった。これを反映して，図書館の数は増加の一途を辿る。図書館数は1899年の時点では38館であったが，1909年（明治42）には281館と10年間で約7倍に増加した。また日露戦争が始まった1904年（明治37）から1908年をみると，わずか4年間で図書館の数は100館から200館へと倍増し，1919年（大正8）には1500館，1925年（大正14）には約3900館に達している[17]。図書館数の増加は，図書館が社会教育の成立過程で教育機関として重視されたことを端的に示しているといえよう。

それと同時に図書館に対する国家の統制も強化されていくことになった。石井は，日本図書館協会の機関誌である『図書館雑誌』誌上で，社会教育政策の進展に伴って図書館を思想善導機関と位置付ける論が展開されることを指摘している[18]。1922年（大正11）には全国図書館大会に対する文部大臣諮問「図書館をして社会教化の中心たらしむるに適切なる方法如何」が提出された。『図書館雑誌』には婦人会や青年団と図書館との連携を強化することや，読書指導を徹底すること，社会主義関係の図書を排除し社会教化関係の図書を置くなどの答申意見がみられる[19]。

このように社会教育の成立過程で図書館は増加し法令も整備されていくが，それと同時に図書館に対する国家の統制も強化されていった。このような状況を踏まえて，以下では東京市立図書館における実践とそれを支えた理念を検討する。

2. 東京市立図書館と今澤慈海

(1) 東京市立図書館の沿革

東京市立図書館は1908年の日比谷図書館開館以降順調に発展し，1921年には全20館から成る図書館網を形成するに至った。この背景には，人々の文化的なものに対する要求の高まりと「都市」の形成がある。日露戦争は戦後景気のみならず，人々のコミュニケーションに対する欲求や教育意識の向上をもたらし，「文化産業」を成立させると共にその享受層を拡大させた。特に東京では三越を代表とするデパートが文化・流行の発信地となり，人々の文化的なものに対する要求を益々増大させた。また，市電などの交通網の発達に伴い，東京は巨大な都市を形成しつつあった[20]。東京市立図書館の沿革は以下の通りである（表1）。

第一にこの表から読み取れるのは，東京市教育会の図書館への注目の早さである。星享や寺田勇吉

表 1　東京市立図書館の沿革

1900（明治 33）	東京市教育会設立（会長：星享　副会長：寺田勇吉）
1902（明治 35）	東京市教育会，通俗図書館設立建議を松田秀雄市長に提出
1903（明治 36）	尾崎行雄，東京市長に就任
1904（明治 37）	坪谷善四郎らにより「通俗図書館設立の建議案」が市議会に提出，可決
1908（明治 38）	東京市立日比谷図書館開館
1911（明治 44）	市立図書館全 19 館に
1914（大正　3）	12 月，今澤慈海が主事に就任
1915（大正　4）	3 月，日比谷図書館には館頭，他の図書館には主事を置き，館頭が全図書館を統制する中央図書館制が始まる
1921（大正 10）	後藤新平が市長に就任，牛込図書館の復興，図書館は全 20 館に 5 月，市役所処務規程改正，図書館は社会教育課に属する，館報発行
1923（大正 12）	成城小学校への文庫貸し出し，関東大震災
1924（大正 13）	3 月，市役所処務規程改正，図書館は学務課に属することとなる

（元文部官僚），坪谷善四郎（博文館の編集主幹，大橋図書館経営，1900 年より東京市会議員）らは市議会内における発言力も大きく，図書館設立に向けて市議会の協力を得ることに成功した。また，この時期大阪と京都では図書館建設の目途が立っていたこともあり，市民の世論形成も容易であったという[21]。当時日比谷図書館主事であった渡辺又次郎が「閲覧が目的で保存するのではない[22]」と語っているように，東京市立図書館は設立当初から非専門的な「通俗」図書館としての性格を明確に打ち出していた。大阪や京都への対抗意識に根ざしながらも，東京市立図書館が一般市民の利用を目的に設立されたことは注目される。

第二の特徴は，尾崎行雄，後藤新平という開明的な人物が東京市長として図書館の発展に貢献したことである。尾崎は「日比谷図書館」の命名，落成に尽力したし，後藤は財政難の中で焼失した牛込図書館の復興や麹町図書館の開館，さらに関東大震災後の東京市立図書館の復興に巨額の予算を投入した。尾崎や後藤の存在によって，東京市立図書館は発展のための行政的基盤が築かれたといえよう。

第三の特徴は，日比谷図書館に館長職に相当する「館頭」を置き，全東京市の図書館を統制する「中央図書館制」が 1915 年に導入されたことである。この制度の下では，館頭の裁量で予算配分や人員配置など図書館の運営を行うことが可能であった。今澤は日比谷図書館を中心とする図書館網の整備，閲覧料の値下げや無料化，児童奉仕の充実など大胆な機構改革を推進している。今澤のリーダーシップはこの制度と相俟って発揮された。1915 年から 1930 年（昭和 5）の東京市立図書館が「発展期[23]」，「黄金期[24]」と評される所以である。

さらに東京市立図書館の立地も注目される。日比谷と深川を除く図書館は，当初小学校に付設されていたこともあって山の手と下町にバランスよく分布している。また，いずれの図書館も市電の駅近くに建設された。館報『其事業』の第 6 号には「東京市立図書館全図」という地図が掲載され，各図書館の最寄駅が示されている。このことは，東京市立図書館が都市の生活に密着した存在であったことを端的に示すものである。このように，東京市立図書館は東京市教育会の図書館に対する意識の高さと市民の利用を第一目的とした設立の理念，東京市長の支援，強力なリーダーシップを発揮する館頭とそれを可能にするシステム，都市生活に密着した存在であったことなどに支えられて発展したといえよう。それでは，東京市立図書館の発展に貢献した今澤慈海とはどのような人物であり，いかなる図書館理念を有していたのだろうか。

(2) 今澤慈海の経歴と図書館理念

今澤慈海は1882年（明治15）愛知県に生まれ，第五高等学校を経て1907年（明治40）に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業，1908年東京市に事務員として就職している。1913年（大正2）より東京市立日比谷図書館の主事補となり，翌14年（大正3）に館長待遇の日比谷図書館主事，15年には機構改革により館頭となり，1931年（昭和6）に東京市主事を辞職するまで館頭職にあった。また，1921年から1939年（昭和14）までは川本宇之介が初代所長となった文部省図書館員教習所の講師も務めている。東京市辞職後は成田中学校校長，成田図書館館長などを務め，1968年（昭和23）死去した。主著に『児童図書館の研究』（竹貫直人と共著，博文館，1916年），『図書館経営の理論及実際』（叢文閣，1926年）などがあり，図書館における児童奉仕の先駆者的存在とされている[25]。

今澤は体系的に図書館学を学んではいないものの，内外の図書館に関する文献を常に検討し，多くの人々が図書館になじみがない当時の日本の実情に適した図書館運営を目指していた[26]。今澤は図書館の最大の使命は「読書趣味の涵養」にあり，「読書力の養成と共に一朝一夕にして出来るものではない。其の十分を期するにはどうしても少年時代から養はなければならない[27]」と考えていた。そして自身の図書館理念について「公共図書館の社会民衆に対する文化的貢献効果は，「生涯的普遍的教育」なる語を以って統括し得べし」，「此の効果は各人の自学自修によるが故に一層顕著なること，（中略）真の文化的発達は各人の能動的意志の自由なる開展によるものなることを記せざるべからず」と述べている[28]。ここには，図書館は「社会民衆」のために存在し，「生涯的普遍的教育」の効果をもたらすものであること，そして「真の文化的発達」は各人の「能動的意志」の展開によってのみ達成されるという今澤の信念が反映されている。そしてこの「生涯的普遍的教育」は，図書館を学校以外の教育機関として機能させるという理念を内包するものであった。後に今澤は，「実際図書館教育そのものの大部分はこの成人教育そのものである」と成人教育を視野に入れながら，「物の成るはその日に成るのではない。成人教育も真にその効果を望むのならば，青年時代，猶遡って幼少時代からの準備が必要である。」と児童への働きかけの重要性を主張している[29]。このことは，後述する図書館での児童室の運営や学校教育との連携などの経験を経て，今澤が当初から重視していた児童への働きかけの意味をより深化させたことのあらわれといえよう。

今澤の図書館理念としてもう一つ挙げられるのは，図書館を「利用者本位」のものとすることである。それは，図書館を開架式にすることを提言した以下の文章に見出される。

近代図書館の特徴中最も顕著なるものは，書架を公開し，読衆をして直接書架に接せしめ，所要の図書を選択せしむる公開書架式閲覧法である。（中略）随てこの施設を欠く公共図書館は，既に業にその点丈で近代的図書館と云へないのである。

公開書架式の利害得失

甲，利点　目録では著者をよく知ったものでなければ選択困難であるが，開架式は，閲覧者が図書そのものに就いて見ることが出来るので，各自は自分の希望の図書を選び出すことが出来る。

乙，欠点　図書の紛失の多いこと

これは開架式に対する危惧の最も大なるものであるが，（中略）尚ほよし多少の物的損害があったとしても，これに幾倍の精神的所得があることを思へば忍ぶべきである。（太字は原文・下線は引用者，今澤慈海「公開書架式閲覧法に就いて」『其事業』第25号，1924年，1-4頁）

ここには今澤の近代性への志向とともに，図書館を人々にとって利用し易く，かつ親しみ易いものとすることを目指した「利用者本位」の図書館理念があらわれている。次章では，今澤の図書館を「生涯的普遍的教育」機関，「利用者本位」のものとする理念が，東京市立図書館においてどのように実践されたのかを検討する。

3. 東京市立図書館における社会教育実践

(1) 「生涯的普通的教育」を目指した実践

前述したように，今澤が図書館を「生涯的普遍的教育」機関とするために重視したのは児童に対する働きかけである。子どもに対する関心は明治後期から高まり，大正中期になると児童中心主義の広まりに伴って児童向けの読物が次々に出版された。もっともこれらの読物は決して安価なものではなく，誰もが手に出来るものではなかった。また児童向けの読物の増加に伴い，読物を管理・統制する必要性が主張されるようになった[30]。このような背景のもと，今澤は児童図書の購入および目録の作成を積極的に行い，貸し出しの手順を図解にして分かり易く説明した。また学校教育との連携にも積極的であった。たとえば 1923 年（大正 12）には成城小学校の要請に応じて，学級文庫の編成のために児童書 200 冊をセットにして貸し出している[31]。また，児童を図書館に呼び込むための「オ話ノ会」は日比谷図書館では毎週土・日に，深川図書館では毎日 30 分行うなど，重視された事業の一つである。話者には少年文学作家として名高い巌谷小波を招いたこともある。その他にもお伽話会や，科学講演会など児童を対象とした多彩な催しがあった。1923 年からは児童の書評を館報に掲載するなど，図書館に来る児童の参加意識の昂揚を意図したと考えられる試みも始まっている。

東京市立図書館では，児童に限らずより多くの人が図書館に足を運ぶように積極的な広報活動を展開している。無料の館報を月一回発行する他，図書館のポスターを作製して市電の中に張り出したり，1923 年には丸善や三越，松屋などとタイアップして読書週間の宣伝を行ったりしており，東京という都市の性質を踏まえた大胆な広報活動が行われた。

さらに，市内 20 箇所の図書館ではほぼ月一回，様々な講演会が開催され幅広い層の人々を図書館に集めることに成功した。講演会の内容は図書館の立地条件や利用者層を考慮して，工業地帯にある深川図書館では工業に関する講演会，学生や官吏の多い外神田の図書館では学術講演会を開催するなどの工夫をしている。実現はしなかったが，今澤は図書の閲覧記録から夏目漱石の人気が高いことをみて，講演を依頼する書簡を送っている[32]。

このように，東京市立図書館では図書館を幅広い層が利用できるよう，図書の閲覧や貸し出し以外にも児童奉仕や講演会などの多様な活動が展開された。これらの活動は，当時の人々の嗜好や時代風潮を踏まえた上で，図書館を幅広い層の人々が利用できる「生涯的普遍的教育」機関とすることを目指した実践であったといえよう。

(2) 「利用者本位」の図書館を目指した実践

東京市立図書館では，閲覧料の値下げや無料化，開館時間の延長，貸し出し方法の簡便化とその PR，「同盟貸付」と呼ばれる図書館間の相互貸借サービスの実施，レファレンスサービスの充実，読書調査の実施など，人々が利用し易くそのニーズに最大限応じようとする「利用者本位」の図書館理念に基づく実践があった。その中でも閲覧料の値下げや無料化は当時の図書館としては画期的なものであった。

サービスの導入と閲覧人員の増加との因果関係は必ずしも明確にされてはいないが，表2にも見られるようにサービスの導入は閲覧人員の増加に何らかの影響を与えたと考えられる。これによると，深川図書館や日比谷図書館の児童室，新聞雑誌室の閲覧料の無料化などのサービスの導入に伴って閲覧者が増加している。特に，日比谷図書館の新聞雑誌室と深川図書館の利用者数は，それぞれ東京市立図書館全体の閲覧人員の20%，10%を占めるようになった[33]。

また利用者の読書傾向を把握し，そのニーズを探るために読書調査が頻繁に実施された。この結果は利用者の職業や性別などの視点から分析され，「『死線を超えて，太陽を射るもの―賀川氏』『愛すればこそ―谷崎氏』『出家とその弟子―倉田氏』等は多数に於いて一頭抽んでゝ居た様で御座居ます[34]」などの評価を織り交ぜながら，閲覧回数の多い順に館報に掲載された。従ってこの読書調査は利用者にとっては読書案内の役割を果たすものであったといえる。

東京市立図書館が「利用者本位」の図書館づくりを目指して運営されていたことを最もよく象徴しているのが，関東大震災後の活動である。震災によって東京市立図書館は全20館中12館を焼失し，これ以外の図書館も大部分は倒壊や蔵書の焼失などの被害に見舞われた。しかし，今澤は被害を免れた日比谷図書館を中心に，人々に「慰安」を与え，地震に関する情報提供を行うべく9月20日から児童室を皮切りに臨時開館を始めている[35]。また人々が多く集まる明治神宮や靖国神社など市内12箇所に臨時図書閲覧所が設置された。ここには娯楽的な図書の他，震災で職を失った人々の生活再建のために，登記や起業関係の書籍，統計等が置かれた。臨時図書閲覧所は開館時間を市電の時間に合わせて延長したこともあり，多くの利用者を集めている。

もちろん，このような「利用者本位」の図書館を目指した実践は今澤一人のみで進められていたわけではない。たとえば今澤の部下であった竹内善作は，娯楽的な書籍を図書館の蔵書とすることへの批判に対する反論を展開している。竹内は「元来，公衆のすべては必ずしも知識を求め図書に渇しているのではない」と図書館の利用者の実情を踏まえた上で，「公共図書館は一面市民自らの納税義務によって維持せらるゝ公有機関たるに於て，市民の日常生活に便宜を与ふるのは，当然過ぎる程当然ではあるまいか。図書館が娯楽的読物を望むもの，若くは全く読書を好まない公衆を牽引する手段として，（中略）公衆の娯楽機関となることに力めるのは，決して間違ったことではあるまい。」と主張する[36]。この論には，公共図書館が市民，公衆のための機関であること，市民の日常生活に便宜を与える存在であるべきことが明確に示されている。このことは，図書館を「利用者本位」のものとする運営方針が今澤以外の図書館員にも共有されていたことを端的に示すものといえよう。

さらに，東京市立図書館が利用者のニーズに最大限応えようとしていたことは，その蔵書構成にも反映されている。東京市立図書館では，竹内の指摘した娯楽的読物だけではなく，大逆事件以後問題視さ

表2　サービスの導入と閲覧人員　（単位：人）

年	東京市立図書館全体	新聞雑誌室	児童室	深川図書館	サービス
1911	517,656	47,149	144,668	39,966	
1916	1,586,569	105,745	229,428	155,444	日比谷児童閲覧料無料化・深川閲覧料無料化
1921	2,110,524	461,015	290,252	170,182	日比谷新聞雑誌室無料化・館報発行
1926	2,055,314	435,611	231,516	103,288	

れていた社会問題や社会主義関係の図書も閲覧に供されていた。前述の「図書館を社会教化の中心たらしむるに適切なる方法如何」に対する答申意見には，閲覧図書を規制するものがあることとは対照的である。

このような積極的な活動の結果，東京市立図書館は年々蔵書冊数，閲覧人数，図書館経費を増加させていった（表 3）。このことは，東京市立図書館がその内容を充実させ，人々に対する働きかけを積極的なものにしていくにつれて，より多くの人々に受け容れられ，利用されるようになったことを示している。また，関東大震災後の図書館の復興には全復興費の 4.3% に相当する 100 万円が充てられたが，ここにも東京市立図書館の発展と，当時の人々の図書館に対する期待を見ることができる。既述したように，当時は図書館を思想善導機関と位置付ける論が優勢になりつつあった。その時期に東京市立図書館においては従来指摘されてきた「思想善導」という枠組みではとらえきれない，図書館を「生涯的普遍的教育」機関，「利用者本位」のものとするという信念に基づく精力的な活動が展開されていたことは注目される。もちろん，この実践が今澤による積極的な活動，今澤の活動を支援する図書館員や制度の充実という条件の下に成り立つ特殊な事例であったことも否めない。なぜなら 1931 年の機構改革によって東京市立図書館の運営は東京市社会教育課に移管され，今澤が辞職すると図書館は思想善導的な機関へとその性質を大きく変化させていくからである。また今澤の読書趣味の涵養を最大の使命とする啓蒙的な図書館理念そのものに，思想善導に通ずるものが含まれていた可能性も否定できない。今澤は「学校図書館の最も大切な機能の一は，児童に対して良書を提供することである[37]。」など図書館において良書を提供することの重要性をしばしば主張しているが，その「良書」の基準を定めるのはあくまで図書館員なのであった。このような傾向は今澤の実践にも見出すことが出来る。東京市立図書館において，今澤が児童を対象とした「オ話ノ会」の開催を重視していたことは既に述べた。日比谷図書館や深川図書館で定期的に開催されていた会以外にも当時人気を博していた口演童話作家を招いた大掛かりな児童講演会は 1921（大正 10）年から 1926（大正 15・昭和元）年までの間に 16 回行われており，今澤の実践が児童奉仕の先駆的なものであることの証左として高く評価されてきた[38]。しかしながらこの「オ話ノ会」についても今澤は「どう云ふ本を読まなければならぬかと云ふことを教へ，其習慣を幼少の頃から附ける」ことを目的とするものであり，「若し此点を閑却して図書館を経営して子供日本を読ませ，お伽話をする」のであれば「蹉跌が出来はせぬか」と述べている[39]。また労働者や徒弟を対象とした「藪入りデー」の実施は，これらの人々が仕事の後に活動写真や盛り場ではなく図書館に来て「修養」に努めることを奨励し，読書の習慣を身につけさせるという意図に基づくものであった。このような今澤の「良書の普及」や「読書趣味および習慣の養成」を

表 3　東京市立図書館の蔵書冊数，閲覧人員，経費

年	蔵書冊数	閲覧人員	経費（円）
1913	114,244	1,403,977	51,175
1914	119,158	1,344,836	60,165
1915	158,275	1,438,215	49,830
1916	141,401	1,586,569	57,412
1917	150,708	1,601,884	59,190
1918	158,976	1,696,994	74,626
1919	169,079	1,792,015	108,522
1920	228,307	1,961,356	183,544
1921	268,491	2,110,524	197,562
1922	298,516	2,107,308	202,688
1923	154,044	1,219,696	190,373
1924	191,894	1,566,242	285,014
1925	212,141	2,430,491	222,518

『文部省年報』より作成

目的とした啓蒙的活動は，図書館を人々の教化機関として活用しようとしていた当時の文部省の社会教育構想とも合致するものであったといえる。確かに今澤には図書館を「生涯的普遍的教育」機関，「利用者本位」のものとするために人々の嗜好やニーズに最大限応じようとする姿勢があるが，最終的な「選択」権，何を「良書」とするかという基準を決定するのはあくまで図書館側にあった。何を読めばよいのか分からない人々のために，「良書」を選択して提供していくことは，利用者を無前提に「啓蒙されるべき」存在とする限り，ともすれば一定の価値観を人々に押し付ける危険性を孕むものである。このことが，人々の嗜好を踏まえながらより深い位相での「思想善導」を目指す「デモクラシー的」な大正期の社会教育構想へと接続する可能性も否定できない。

以下では東京市立図書館の発展を踏まえ，当時の社会教育の策定に携っていた乗杉嘉寿と川本宇之介における図書館の位置づけを概観し，今澤の図書館理念との関係を検討する。

4. 官僚の社会教育構想における図書館—乗杉嘉寿，川本宇之介を中心に—

乗杉と川本は，それぞれ通俗教育を専管する普通学務局第四課の初代課長とその部下として社会教育の浸透に努め，『社会と教化』の編集にも携っていた。乗杉と川本は社会教育を実践する機関として図書館に注目し，しばしば社会教育と図書館の関係に言及している。まず，乗杉の図書館の位置づけを見てみよう。

乗杉は「社会教育の方法中，外から之を強ひるのでなくして，各人自らの要求によって，その欲するだけ修養することが出来，而もその効果の著しいのは図書館設備である。」として，図書館を「各個人を文化的に洗練するには最もよき機関」と評価している[40]。乗杉の構想において，社会教育は二つの役割を担っていた。第一は自発的な学習態度の養成を目標とする学校教育再編の補充であり，第二は国民全体の思想善導である。その中で，図書館は国家を繁栄に導く「自主人」を育成する社会教育の重要な機関なのであった[41]。乗杉は図書館を自発的に自分の要求に応じた学習を行うことを可能とする場，「各個人を文化的に洗練する」機関と評価している。しかしながら，乗杉は図書館を発展させ，人々の自発的な学習活動を促進することを主眼においていたわけではない。それは，「最も注意すべきものは（中略）図書の選択が一番の要件である。読むことそれ自身は良くもなければ悪しくもない。良い本を読むことに依って初めて宣いのである[42]。」にもあらわれている。乗杉にとって図書館はあくまで国家の発展を目標として機能すべきものであり，個人の知識や文化的生活の向上がみられたとしても，それは副次的なものに過ぎないのである。

また，川本宇之介は社会教育を「教育の社会化」と「社会の教育化」を促進するものととらえ，乗杉と同様に図書館を社会教育の実践の場として重視していた[43]。川本は図書館における教育を，「一生涯に亙る過程とか，自由意志に基づく自己教育とか，デモクラシーの思想とか，余暇の賢明なる活用と殊に最も関係深く，良くその原理を実現せるもの」と考えていた。なぜなら，「図書館は，児童青年より老人に至るまで（中略）其の最も都合の良いときに各自の来るのを俟ち，其学力其職業，その希望に応ずるところの図書を与へ以て新知識新技術新思想を供給する」からである[44]。

川本は，乗杉と比較すると図書館を「一生涯に亙る」教育，自由意志に基づく「自己教育」の場とする位置づけをより明確に打ち出しているといえよう。もちろん，川本が図書館における教育を「国民形成」や「思想善導」に収束していくものとしてとらえていたことも事実である。なぜなら川本は「いふまでもなく，この新聞雑誌は社会教育上有力なる一機関である[45]」が「この間に又種々の悪影響を与ふ

るものあることを忘れてはならない[46]」としているからである。しかしながら，乗杉や川本の社会教育構想における図書館の位置付けは「思想善導」という枠組みに根ざしながらも，個人の要求に応じた学習機会の提供や生涯的な教育機関の役割を模索する「デモクラシー的」志向を併せ持つものであったことも指摘できる[47]。つまり，乗杉と川本は当時の人々の文化的なものへの志向や学習意欲の向上を社会教育構想の中に組み込みながら社会教育を進展させていこうとしていたのだといえる。このような乗杉と川本の図書館の重視は構想にとどまらず，文部省図書館員教習所の開所という形で図書館の発展に貢献した。この教習所は当時としては珍しい男女共学制の，日本初の図書館員養成機関である。教習所にはほとんど何の後ろ盾もなく，乗杉と川本は手弁当で講師を務めていたことを考えると，両者には図書館を社会教育機関として発展させる意図が明確にあった。この教習所では今澤も講師を務めていたことから，乗杉・川本と今澤の間には面識があり，特に川本に関しては，今澤が館頭であった一時期（1916年4月-1920年7月），東京市教育課に勤務していた関係から図書館理念に関して互いに影響するところが少なからずあったのではないかと考えられる。川本の構想と今澤の図書館理念を比較してみると，図書館を「生涯的」な教育機関と位置付けている点において共通している。そしてこのような社会教育官僚の図書館の位置付けは，今澤の図書館理念や当時の文化的なものを志向する時代風潮と共振するものであり，それは東京市立図書館における実践が成功したこととも無縁ではないだろう。つまり今澤の東京市立図書館における実践が可能であったのは，乗杉や川本の図書館の位置付けに今澤の理念と通ずる「デモクラシー的」な要素が存在する一方で，今澤の「良書の普及」と「読書趣味習慣の養成」を目標とした啓蒙的な図書館理念にも，デモクラシー的な方法を内包しつつも社会全体の教化を目指した乗杉や川本の社会教育構想と結びつく可能性があったからだといえる。従って東京市立図書館は東京の人々の都市生活に密着し，文化的要求の高まりに応えただけではなく，乗杉や川本の社会教育構想を実践した存在であったとも考えられる。

おわりに

社会教育成立期の図書館について社会教育史研究においては「思想善導機関」としての役割が強調され，その一方で，図書館史研究においては図書館の「デモクラシー」的な性質が強調されるという二項対立的な評価がされてきた。本稿では，これらの研究を踏まえて東京市立図書館における社会教育実践を検討した。

東京市立図書館では，今澤慈海の図書館を「生涯的普遍的教育機関」，「利用者本位」のものとする理念に基づく活動があった。これらの活動は，当時の人々のニーズや文化的要求の高まりに応じようとようとするものであり，都市生活に密着して展開されたこともあって，東京市立図書館を発展させた。その一方で，図書館史研究において公共図書館の先覚者として高く評価されてきた今澤の理念は，多分に啓蒙的な要素を内包するものであった。利用者のニーズを汲み取りつつ，図書館の運営者が「良書」の基準を決定し利用者に提供することが，一定の価値観を押し付ける危険性を潜在的に持つものであったことも否めない。

今澤の図書館理念や実践を踏まえ，当時の社会教育に携った乗杉，川本における図書館の位置づけを検討すると，図書館を自発的な学習の場，生涯にわたる教育の場とする点において今澤の理念に通ずるところがあった。また，今澤の啓蒙的な図書館理念も乗杉や川本の社会教育構想に接続する可能性を持つものであった。このことから，東京市立図書館は官僚の構想と接点があったからこそ発展したのであ

り，その意味において東京市立図書館は当時の社会教育構想の一つの実践であったとも考えられる。

従って，東京市立図書館が「思想善導機関」，あるいは思想善導の「少数の例外」や「デモクラシー」的存在であるという単純な二項対立的評価を下すことは出来ない。むしろ東京市立図書館の事例は，社会教育成立期の社会教育実践を歴史的に検討する際に，思想善導かデモクラシーかという二項対立的な枠組みで論じることの危うさを示しているといえよう。なぜなら，本稿では従来「デモクラシー」的であると評価されてきた今澤の理念や実践が啓蒙的性質を備えたものであり，その啓蒙性ゆえに，今澤の理念と実践は，対極にあるとされてきた「思想善導」的な社会教育構想と共存し得たことが示されたからである。今後は図書館における社会教育実践とその教育機能をより詳細に明らかにすることを通じて，社会教育成立期の社会教育に「矛盾」として存在するとされる思想善導とデモクラシーがどのような連続性を持ち，それがどのように実践されたのかを歴史的に検討していくことが必要である。このことによって，個々の教育実践が如何なる理念に基づくものであったか，さらにこの実践が当時の教育構想や社会にどのように位置付くのかを明らかにし，実態を踏まえた社会教育史を描出することが可能になるだろう。本稿で明らかにしたことはその一端を担うものである。

注

1) 社会教育の時期区分については，小川利夫「現代社会教育思想の生成―日本社会教育思想史序説―」『講座現代社会教育Ⅰ　現代社会教育の理論』所収，1977年，亜紀書房および松田武雄「社会教育史研究における先行研究と方法論の検討―社会教育成立期を中心に―」『九州大学大学院教育学研究紀要』第44集，1998年，35-64頁を参照。
2) 『野間教育研究所紀要』第二〇輯，1961年，大空社，1992年，136-137頁所収。
3) 宮原誠一『図書館と社会教育』春陽堂，1954年や宮坂広作『近代日本社会教育史の研究』法政大学出版局，1968年にも図書館に関する言及があるが，いずれも断片的な記述にとどまっている。
4) 国立教育研究所編『日本近代教育百年史　第7巻社会教育(1)』1974年。
5) たとえば裏田武夫，小川　剛「明治・大正期公共図書館研究序説」『東京大学教育学部紀要』第8号，1965年や宮坂広作，前掲書がある。
6) たとえば松田武雄「制度化に至る地域通俗教育の多様性と変容―1880年代から1910年代の東京を事例として―」『日本社会教育学会紀要』第38号，2002年，111-120頁などは社会教育政策と地域における社会教育実践とを検討したものである。
7) 山口源治郎「草創期社会教育行政と公共図書館論―川本宇之介の公共図書館論をめぐって―」『公立図書館の思想と実践』森耕一追悼事業会，1993年，69-84頁。
8) 奥泉和久「『市立図書館と其事業』の成立と展開」『図書館界』第52巻第3号，2000年，134-147頁。
9) 是枝英子「大正デモクラシー時代の図書館」『専修人文論集』54，1994年，145-180頁。
10) 石井敦『日本近代公共図書館史の研究』255-257頁。
11) 是枝，前掲論文，145頁。
12) 赤星隆子「今沢慈海の児童図書館論―英米文献との関係を軸とした一考察―」『図書館学会年報』第36巻第4号，1890年，167-182頁。
13) 細谷重義・関野真吉編「今沢慈海著作年表（稿）」『ひびや』第13号，1980年，72頁。
14) 1921年（大正10）より発行。1938年（昭和13）77号で廃刊となる。
15) 国立教育研究所編，前掲書，165-171頁及び430-446頁参照。
16) 国立教育研究所編，前掲書，895頁。
17) 図書館数は各年の『文部省年報』による。
18) 石井，前掲書，255頁。
19) 『図書館雑誌』第50号，1922年。
20) 南博・社会心理研究所『大正文化1905-1927』勁草書房，1965年，118-120頁，162-165頁参照。
21) 佐藤政孝『市民社会と図書館の歩み』第一法規，1979年，34頁。

22) 中央新聞，1908 年，7 月 4 日
23) 東京都立日比谷図書館『五十年紀要』1959 年，25 頁。
24) 細谷重義「東京市立図書館の変遷―日比谷の創立から現代まで―」『ひびや』4, 1958 年，4 頁。
25) 石井敦編『図書館を育てた人々　日本編 I』1983 年，89-96 頁。
26) 今澤が海外の図書館学から受けた影響に関しては，赤星隆子，前掲論文に詳しい。
27) 今澤慈海『児童図書館の経営』3 頁。
28) 今澤慈海「公共図書館は公衆の大学なり」『其事業』第 1 号，1921 年，2-3 頁。
29) 今澤慈海「成人教育と図書館」『其事業』第 30 号，1925 年，3 頁。
30) 小山静子『子どもたちの近代　学校教育と家庭教育』吉川弘文館，2002 年，加藤治『駄菓子屋・読み物と子どもの近代』青弓社，2000 年。
31) 成城小学校ではドルトン・プラン導入の準備として，創立当時から図書館教育を重視していたことが成城学園発行の『教育問題研究』から分かる。なお，成城小学校の図書館教育に関しては塩見昇の研究「成城の読書教育と学校図書館」『大阪教育大学紀要』第 IV 部門第 26 巻第 3 号，1987 年，145-155 頁を参照。
32) 東京都立図書館『ひびや』第 148 号，1999 年，102 頁。
33) 1926 年(大正15/昭和1)には閲覧人員が減少しているが，これは 1923 年の関東大震災の影響が残っているためである。
34) 『其事業』第 15 号，1923 年，14 頁。
35) 9 月 22 日からは新聞雑誌室を開放し，図書館前には長蛇の列ができたという。(『其事業』第 18 号，1924 年，6-13 頁)。
36) 竹内善作「図書館の郷土化」『其事業』第 29 号，1924 年，1-3 頁。
37) 今澤慈海「学校図書館に就いて」『其事業』22 号，1924 年，2 頁。
38) 小河内芳子「資料　東京の児童図書館　明治 20 年 (1887)―昭和 20 年 (1945)」『Library and Information Science』No. 9, 1971 年，209-229 頁。
39) 今澤慈海「図書館及通俗読み物」文部省普通学務局編『社会教育講演集』1921 年，22-23 頁。
40) 乗杉嘉寿「文化生活と図書館」『社会と教化』第 2 巻第 9 号，1923 年，4 頁。
41) 乗杉嘉寿『社会教育の研究』同文館，1923 年，45-48 頁。
42) 同前。
43) 川本は，「学校教育以外に於て，寺院寺社も含ませて論ずると図書館が，矢張其の他の社会教育の中心として大に活躍する所がなければならないと信ずる。」と述べている。(「教育の社会化と社会の教育化」『社会と教化』第 1 巻第 9 号，1921 年，16 頁)
44) 川本宇之介『社会教育の体系と施設経営・経営篇』最新教育研究会，1931 年，2-3 頁。
45) 川本宇之介「教育の社会化と社会の教育化」『社会と教化』第 1 巻第 8 号，1921 年，11 頁。
46) 同前。
47) 川本の図書館論は『社会教育の体系と施設経営・経営編』(1931 年) において一応の体系化をみるが，少なくとも大正期に関しては乗杉の図書館の位置づけとの違いは明確ではない。従って本稿では，両者を並置して今澤の論と比較を行った。乗杉と川本の図書館の位置付けの違いは両者の社会教育構想の違いに関わると考えられるが，これは本稿とは別に論じられるべき大きな問題であるので機会を改めて論じたい。